電脳遊客

万墨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
電脳遊客

【Ｎコード】
Ｎ０４５２Ｚ

【作者名】
万墨人

【あらすじ】
仮想現実に構築されたのは、江戸時代！　そこには江戸町人、侍、商人などが生活し、現実世界からは？遊客？と呼ばれるプレイヤーが、江戸の暮らしを体験する。この江戸仮想現実を創設したメンバーの一人、鞍家二郎三郎は、悪党一味の動きを探るため、活動を開始したのだが……。

一

ちゃぷりと、微かな水音を立て、船頭の留吉(とめきち)が艪(ろ)を動かした。きい……と、小さな軋み音に、留吉は全身で慄(おのの)いて、俺を見た。

「二郎三郎の旦那……。どうしても、いらっしゃる御つもりでございますか？」

俺は無言で頷いた。むっつりと、俺が押し黙っているので、留吉は仕方なさそうに、ゆっくりと艪を動かし、船を進める。

若い。年の頃は、二十歳を多くは過ぎてはいまい。逞しい上半身に腹巻をして、下帯一丁で、月代は丁寧に剃り上げ、丁髷は片側に垂らした流行(はやり)の髪形をしている。

暗い。

星はあったが、空に月はなく、目の前はべっとりとした闇に覆われている。背後で、留吉がはあはあと荒い息を吐いているのが、はっきりと判る。

舟の舳先(へさき)辺りに蹲(またが)っている俺は、黒地に伊呂波(いろは)四十八文字が、白く抜かれている着流し姿で、頭は蓬髪にして丁髷を結った痩せ浪人姿だ。

俺の名前は鞍家二郎三郎(くらかじろうさぶろう)。ご想像通り、気楽な浪人である。ただし普通の浪人とは、ちょっと違いがあるが……。

ここは品川の、人里から少し離れた川辺の、葦(あし)原だ。人伝に耳にしたのは、この辺りではなぜか神隠しや、幽霊などの噂が絶えず、そのせいか昼間でも人気が無く、閑散としている。ましてや真夜中だ。信じやすい人間にとっては、近づくのも恐ろしかろう。

何しろ、近くには鈴ヶ森刑場がある。従って、昼間でも近づく町

人はほとんどいない。

かさこそと、川舟の舳先に生い茂った葦が触れる音がしている。

「もそっと、右へ寄せろ……」

小声で命じると、留吉はびくりと身を震わせた。

「旦那……真っ暗闇でござんすよ。お見えになっているんですかあ……？」

ああ、と俺は低く答えた。

今、俺の両目は、暗視モードにしていて、星空ほどの光でも、はっきりと周辺の様子は見て取れる。増幅された光に、葦の穂先が、ぬれぬれと光っているように見えている。密生した葦原の先に、向こう岸が見えて、荒れ果てた廃寺が、暗闇に立ちはだかっている。

背後の留吉が震える声で訴えた。

「旦那、よしましょうや！　命あっての物種って言うじゃありませんか……」

俺は小さく舌打ちをした。やはり、他人を頼むのではなかった。舟を漕ぐ技術は修得していなかったため、度胸自慢の留吉に頼んだのが間違いだった。留吉はすっかり、怯えきっている。普段から「俺には怖いものなど、何にもねえ！」と勇んでいたので、それならと依頼したところ「任してくだせえ！」と胸を叩いたのだが、今になって、完全に恐怖に支配されている。

俺は船板に横たえていた両刀を掴むと、腰に手挟（たばさ）んだ。ぐいっ、と帯にこじ入れ、立ち上がる。俺の動きで、船が少し揺れた。

ただそれだけで、ひいっ……と、留吉が押し殺した悲鳴を上げる。
俺は振り向いて、留吉に命じた。

「一時間だけ、待っていろ。それで、俺が帰らなかったら、一人で戻れ。あとは火盗改の榊原源五郎（さかきばらげんごろう）に話をすればいい。判るな？」
「一時間？　ああ、半刻のこってすね。わ、判りました……」

俺たち現実世界の【遊客（プレイヤー）】は、どうしても江戸の時制に慣れていない。江戸のＮＰＣ（ノン・プレイヤー・キャラクター）たちは、俺たちと付き合ううち、俺たちの物の言い方に、合わせてくれている。俺は仮想現実江戸創設者の一人だが、緊張していると、つい現実世界の物言いになる。
俺の視界に、留吉の丸い顔が背後からの遠くの町の灯火を背景に黒々と見えている。
町の灯火は、俺の増幅された視界では、眩しいほどにぎらぎらと光り輝いて見えていた。留吉は顔中から冷や汗を噴き出させ、そのため皮膚がてらてらと光っていた。両目の瞳孔がぽっかりと開き、小さく膝頭が震えている。
俺はぐっと留吉に近づくと、力を込めて言い聞かせる。

「いいか、お前はここでじっとしていればいいんだ！　震えるな！　落ち着いてろ！」

俺の言葉に、留吉の震えがぴたりと止まった。俺のような本物の仮想人格（ペルソナ）だけが、留吉ら江戸のＮＰＣ（ノン・プレイヤー・キャラクター）に対し、圧倒的な気迫（カリスマ）能力を発揮できる。
しかし、俺は滅多にこの能力を使おうとは思わない。
何と言っても、俺たち現実世界の【遊客】は、仮想現実の江戸に生きるＮＰＣたちに対し、絶対的優位に立っている。だから、気迫を発揮して言いなりにするのは、極めて卑怯な気がするからだ。
俺は懐に手を入れ、小判を一枚取り出した。留吉の手を取り、握

らせる。

「帰ったら、同じだけ渡す」

手に握らせた小判の重みに、留吉の顔が綻んだ。手の平を上下に揺らし、重みを確かめ、急いで腹巻に押し込んだ。仮想現実の江戸では、貨幣価値が本物の江戸とは少し違うが、小判一枚あれば、留吉のような若者なら、三ヶ月は遊んで暮らせるだろう。

いそいそと川舟から岸に上がると、舫(もやい)を結わえ付ける場所を探す。

「お前の目の前に、手ごろな岩が突き出ている。それに結わえ付けろ」

指示してやると、手探りで留吉は縄を結わえた。落ち着こうとするのか、腹巻から煙管を取り出し、火打石を擦ろうとするのを俺は慌てて止めた。

「よせ！　見咎められたら、どうする」

びくっと、留吉の動きが止まる。俺はもう一度、言い聞かせた。

「いいな。動くなよ。俺が合図するまで、じっとしていろ！」

「へえ……」

弱々しく答え、留吉は蹲った。

俺はそれきり、留吉の存在を頭から追い払い、目の前の廃寺に向かってそろりと歩き出した。

二

ゆっくりと俺は廃寺に近づき、両目の暗視モードを、赤外線に切り替えた。【遊客】のみが使える、一種の特殊能力だ。

超能力とは言いたくない。あれは不可知論の領域なのだが、俺たちの能力は、完全に科学で説明可能なのだ。

一瞬で、灰色の視界が、揺らめく紅蓮の炎に包まれた荒れ寺に変化した。昼間の熱が、寺の崩れかけた塀や、屋根の瓦から放射されているのが判別できた。ほとんどは、昼間の日差しの名残りだが、廃寺の奥からは、別の熱の放射が感知される。

門を見ると、幾人かの足跡が、熱の蟠(わだかま)りを見せ、廃寺の正面に消えている。確実に、夜になって、誰かがこの場所に足を踏み入れている。それも一人ではない。

俺は、にやりと唇を歪め、他人からは「ハイエナの笑い」と呼ばれる表情を作った。そんなに俺の顔は悪どいのかと、俺は常々疑問に思っているが、他人の評価など、そんなものだ。

ぴたりと動きを止め、耳を澄ます。

途端に、それまで意識していなかった虫の音、葦が僅かな風に嬲られ、掠れる音、遠くのざわめき、風の音がわっ、とばかりに、俺の耳に飛び込んでくる。感度を上げすぎたせいだ。

俺は意識操作で、俺にとって意味のない音をカットする？カクテル・パーティ？フィルターを起動させた。通常、聴取できない超低音――二十ヘルツ以下の超低周波に意識を集中させる。

思ったとおりだ！

微かな律動音(シグナル)が、地面の下から聞こえてくる。地面に耳を押し当てると、さらに律動音は、くっきりと聞き取れた。
会心の笑みが浮かぶ。その時ばかりは、俺は、狼が獲物を前にした時の、涎がたらたら口の端から垂れそうな、凄みのある笑みを浮かべているはずだ。

じわじわと、俺の体温で、辺りが赤外線の放射を見せ始めたので、俺は視界を通常より、やや感度を上げた、夜目に変えた。暗視モードほど、辺りははっきりと見てとれないが、うっかり星空を見上げると、星の光さえあまりに眩しすぎるので、このほうが都合がいい。
俺は門を潜り、境内に足を踏み入れた。
荒れ果てた庭に、覆い被さるような木々が鬱蒼と茂っている。湿気が強いのか、ぷん、と苔の匂いが籠もっていた。

慎重に、廃寺に近づいた。
足音は立てない。

俺は自分の仮想人格をデザインする際、感覚を研ぎ澄ませた、忍者のような性格を頭に入れて製作している。多少、通常のＮＰＣに比べれば体力は上回り、苦痛に耐える上限も高めにしているが、見かけはぱっとしない、ただの男である。
他の【遊客】は、山のような筋肉の固まりか、あるいは女と見間違うほどの優男、女なら、目の飛び出るような絢爛豪華な美女にするのだが、俺はほぼ、現実の自分と同じ見かけにしている。
よくからかわれる長い顔。大きな口。両目は細く、狡賢そうな表情をしている。どう見ても、水も滴るいい男、とは言いかねるが、なあに、これでも、俺は結構もてるのだ。

話が横道に逸れた。

俺は全身の神経を、ぴりぴりと緊張させ、一歩一歩、そこに爆弾が埋まっているかのように、足を下ろし、じわりと体重を乗せると、次の一歩を踏み出した。

廃寺の障子は開け広げになっている。俺は土足で踏み込むと、周囲を抜け目なく見渡した。

あの柱が怪しい。

他の柱が、雨風に打たれ、今にも折れそうな枯れ切った状態なのに対し、なぜか、俺の目のつけた柱だけは、つやつやと表面が黒光りしている。何人もの手が触り、手脂が表面を保護しているのだ。

確認のため、一瞬赤外線モードにすると、柱の周りには、以前の足跡が熱の残滓を見せ、微かに光っている。

顔を押し付けるようにして、しげしげと見入る。目を精細モードにして、表面を拡大する。

あった！

目に見えるか、見えないほどの、小さな合わせ目が見てとれた。俺は指先を近づけ、爪先を引っ掛けるようにして、ぐいと力を込めた。

呆気なく、ぱたりと表面が開き、十進キーが俺の目の前に顕わになる。確実に、暗証入力装置だ！　キーの下には、カードを挿入する細い隙間があった。

俺は懐から、かねて用意の開錠セットを取り出した。指先で薄い読取装置を掴むと、カード挿入口に押し込む。読取装置のディスプレイが忙しく瞬き、電子の指先が、目の前の暗証入力装置に隠された、開錠システムをまさぐる。

ぴーっ！　と、俺にとっては、一杯に膨らんだゴム風船が勢い良く破裂したほどの音が響き、暗証を探し当てたと読取装置が誇らしげに作業の終了を告げる。
溜息のような音が洩れ、寺の床板の一部が僅かに持ち上がった。あれが入口だ！
俺は屈みこみ、床板をゆっくりと押し開けた。歯ぎしりするほど、自分でも慎重な動きである。

落ち着け！　落ち着け！

留吉に言い聞かせた台詞を、自分に呪文のように繰り替えす。

開いた！

黒々と、地下への入口が、俺の目の前に現れた。階段がついている。
俺は腰の大刀の鯉口を切り、いつでも抜き打ちできる構えを取って、地下への階段に足を載せた……。

三

俺は、おっかなびっくりで、階段を降りて行く。正直、こんな冒険は、初めての経験だ。俺たち【遊客】は、ＮＰＣなど比べられないほど、抜群の体力と、運動神経を備え、様々な武道を修得している。

俺自身、北辰一刀流の達人である。しかし達人のみが到達できる、どんな危急の際にも発揮する、精神状態までは真似できない。

白状すると、一刻も早く、ここから尻尾を巻いて逃げ出したいのだ。留吉の前ではせいぜい強がっていたが、恐ろしいのは俺も同じだ。

ばたん！　と、出し抜けに背後で音がして、振り返ると、入口の天板が閉まっていた。自動で閉まったのだろうか？　それとも？

当然、辺りは真っ暗闇に包まれる。完全な暗闇に、俺は暗視モードにするかどうか、迷っていた。

どきどきどき……。俺の心臓が、胸の奥で陽気に跳ね回っている。

次の瞬間、目の前が真っ白になった。悲鳴を押し殺し、俺は両目を手で覆い、蹲った。

恐る恐る手を開くと、指の隙間から人工的な光が差し込んでくる。危なかった！　もし暗視モードにしていたら、今の不意の光をまともに見てしまい、視神経に深刻なダメージを残したはずだ。

俺は冷え冷えとした照明の下、地下通路に立ち尽くしていた。

何も知らずに連れて来られたら、現実世界のどこかの建物に迷い込んだのかと、思ってしまうだろう。コンクリート打ちっ放しの、無愛想な壁面に、床はすべすべした材質でできている。絶対、江戸

時代の工法ではありえない！

いったい、どこのどいつが、明白な違反を犯したのか？　俺は怒りで、一瞬恐怖をすっかり忘れ果てていた。

この江戸は、俺たちが創設した、大事な仮想現実である。絶対、許すべきではない！

俺は左右を眺めた。どちらへ向かうべきだろうか？

右の方向が奥深そうである。

通路を辿ると、二手に別れている。左の方向から、足音が聞こえてくる。

俺は緊張した。

と、同時に、明らかな敵の出現に気分が軽くなる。正体不明の脅威に比べれば、遙かにマシだ！

遂に敵が現れた。

どっしりとした身体つきの、大男だ。現代的な通路にまるで似合わない、山賊のような格好をしている。

何かの獣の毛皮を身につけ、腰には胴太貫のような、どでかい大刀をぶち込んでいる。顔には真っ黒な髭を生やし、頭は総髪にして、戦国時代のような茶筅髷をしている。

大男は俺を認め、ニッタリと笑いかけた。

「お前、誰？」

ぶつぶつと途切れるような、ぶっきら棒な言葉を発する。こいつ、馬鹿か？　俺はそれでも、一応、返事をしてやった。

「お前こそ、誰だ？　ここは何をするところだ？」

大男の目が見開かれた。一瞬で表情に怒りが浮かぶ。
「お前、敵！　殺す！」

知性の欠片も感じさせない、極端に言葉数を節約した話しかたである。多分、山賊属性の、ＮＰＣだろう。
俺は大男に向かって、一歩ぐいっと踏み出し、両目にあらん限りの力を込め、睨みつけた。
大男の表情に、微かな不安が浮かんだ。

「どけ！　命が惜しければ、俺に手を出すな！」

俺が叫ぶと、大男はたじたじとなった。思ったとおりだ！　こいつはＮＰＣだ！　ＮＰＣは、俺のような現実世界の【遊客】には、本能的に恐怖を抱くのである。剣道の世界で言う「位負け」ってやつだ。
それでも大男の脳味噌は、救いようのないほどトロいらしい。大男はもぞもぞと手探りで腰の胴太貫に手を伸ばした。
自分が武器を持っている事実に力を得たのか、唸り声を上げ、すらりと抜き放つ。
照明に、大男の刀身が玲瓏（れいろう）とした光を放っている。柄にもなく、大男はいい刀を選んでいる。
大男は両腕で柄を掴み、じりじりと刀身を上げ、上段の構えを取る。ずっしりと腰が下り、全身から必殺の気合が放たれた。

大男の腕が完全に頭の上に持ち上げられ、わざとのように、胴ががら空きになる。誘いの手だ。胴に打ち込めば、即座に腕が振り下ろされ、俺の頭に刀が下りてくる。
俺は上体を心持ち前へ傾け、大男の顔から視線を逸らし、一点に集中しないようにして抜き打ちの構えを取った。手は大刀の柄に軽

く添えられているが、まだ抜かない。
大男は自信をぐらつかせたようだ。それでも俺の力量を見誤るという、どうしようもない過誤を犯す。

「うおーっ！」

大男の口から、通路一杯に響き渡るような、大声が上がった。が、俺は大男が口を開く寸前、叫び返していた。

「きえーいっ！」

俺の叫び声に、大男の構えがガタガタとなった。両腕が伸びきり、腰が引け、必殺の刀身から完全に力が抜け切る。
【遊客】のみが発する、裂帛（れっぱく）の気合だ。俺の気合に対抗できるＮＰＣは、金輪際、存在し得ない。
俺は身を低くし、大男の振り被る刀を楽々と躱（かわ）し、手にした刀を一閃させた。
ぼくっ！　と、鈍い音が響き、大男は胴太貫を振り被った姿勢のまま、凝固していた。

「ぶふっ！　うぐうっ！」

大男の顔が、見る間に真っ赤に染まる。頬がぷーっ、と河豚提灯のように膨らみ、全身を海老のように屈める。
がちゃん、と派手な音を立て、大男の手から胴太貫が床に転がった。
俺の一刀が、大男の脇腹をまともに捉えていたのだ。恐らく、大男の肋骨の何本かが折れているだろう。
俺は手にした自分の刀身を、照明に翳（かざ）していた。大男に抜き打ちの構えを見せた理由は、俺の刀身を見せたくはなかったからである。

なぜなら、俺の刀には刃がついていない。つまり、完全な鈍(なまく)ら刀なのだ。
俺の方針として、ＮＰＣを殺すのは極力避けたい。そのため、刀には、わざと刃をつけない鈍ら刀を愛用している。もしも大男が俺の刀身を目にしたら、完全に俺を舐めて懸かるだろうと判断したのである。
しかし、いくら鈍ら刀とはいえ、全長数十センチの鉄の棒である。力を込めて殴り懸かれば、冗談事では済まない。

どた！　と、大男は横倒しになった。

俺は刀を鞘に収め、大男の歩いてきた方向へ歩みを進める。背後で、大男の苦痛に喘ぐ呻き声が聞こえてくるが、無視する。
さらに下層へ通じる階段を見つけた。

俺は階段を下りて行った。

四

階段を下りる、俺の足取りは、自信に満ち溢れていた。
何と言っても、大男との対決が、俺に確固とした、自分の戦闘能力に対する信頼を取り戻してくれた。もう、躊躇(ためら)いはない。

しかし階段を下りて、さらに地下通路を先へと進むと、俺の胸に、驚愕の感情が湧いてきた。
廃寺の地下室は思ったより広大で、規模は信じられないほど大きい。このような大規模な工事を、いつ始め、完成させたのだろう？
地下を掘り抜くだけで、大量の土や、泥が出たはずだ。コンクリートはどこから搬入したのか？　天井に取り付けられている照明は、最新の設備だ。どれ一つ見ても、江戸で入手は不可能な材料ばかりである。

俺の胸に、じわじわと、ある確信が生まれてくる。

多分……いや、絶対、この地下室を作り上げた張本人は、現実世界の【遊客】の一人だ。しかも、プログラム優先アクセス権を持つ、上位のプログラマーだ。
工事や、建材の搬入など面倒な手続きは一切無視して、江戸の仮想現実プログラムに、廃寺の地下に地下施設を？上書き？させたのだろう。
これだけの工事だと、半年……いや、一年は優に掛かる。だが、？上書き？なら地下施設のデータをプログラムに書き込むだけで、一瞬でできあがる。

俺は、いつしか、歯軋りしている自分に気付いた。あまりの怒りに、自分がぎりぎりぎりと奥歯を食い縛っているのも、気付かない

くらいだ。
何と言う横暴！　専横！　無茶苦茶にも程がある！　俺たち創設者のグループは、江戸を仮想現実に作り上げた後は、一切、プログラムの上書きのような、手出しは禁じている。
江戸に生きる人々の独立独歩を、俺たちは尊重している。江戸が仮想現実で存在を始めてからは、順調に発展を続け、俺たちの希望通り、江戸文化の華を咲かせていた。
どこのどいつが、俺たちの努力を踏みにじりやがったのか……！

いかん、いかん！　冷静になるべきだ。

頭をぶるっと振って、顔をぺろりと手で撫で、俺は改めて、通路に注意を振り向けた。
通路の両側には、所々、ドアが取り付けられている。コンクリートの壁面同様、無愛想で、無機質な材質だ。ドアの一つに近づき、拳を使って叩くと、こんこんと固く、虚ろな音が響く。材質は鉄で、灰色の塗装を施されている。

思った通り、鍵が掛かっている。ドアには番号が振られている。番号は漢数字で、俺の目の前のドアには「十五」と墨痕も鮮やかに記されている。

ふむ？

俺は首を捻った。
近代的な地下施設に、ドアの漢数字は、どうにも不似合いだ。漢数字の筆跡は、くっきりと墨の色を見せている。もし、俺なら、このような施設を作り上げたら、ドアに記す数字はアラビア数字にす

るだろう。
奇妙な不一致。今までの、現実世界の【遊客】が関わっているという推測が、俄然、怪しくなってくる。
ばたばたと乱れた足音が聞こえてくる。足音は、俺の前方からだ。俺は、さっと周囲を見渡した。
隠れ場所は、どこにも見当たらない。そのつもりもない。俺はぐっと両足を踏ん張り、待ち受けた。

五

前方から数人の、薄汚い格好の、見るからにヤクザ者と判る男たちが駈けてくる。ヤクザ者は、俺を認めると、踏鞴（たたら）を踏んで立ち止まった。

「おおっ、と！　誰でえ？　検校（けんぎょう）様が、見て来いと仰ったが、どこから迷い込んできやがった馬の蝿だあ？」

先頭の、何を考えているのか、女物の着物をだらしなく着崩し、足下は雪駄を履いている細長い顔の男が、いがらっぽい大声を上げ、しげしげと俺の顔を眺めている。

こいつが一団の頭目と言うか、兄貴分だろう。歌舞伎の「暫（しばらく）」という演目で使われそうな、長さ一間ほどもありそうな、巨大な刀を肩に担いでいる。

他の連中は、口を利く知性も持ち合わせていないのか、先頭の男の背後で押し黙ったまま、陰険な視線で、俺を睨みつけている。どの顔を見ても、魯鈍（ろどん）そのもので、品性の卑しさが、姿勢から物腰から滲み出ていた。連中も手に手に、様々な武器を持っている。

刀は元より、手槍、棍棒、大槌などなどで、これだけの種類があれば、兵具屋でも店開きできそうである。

検校様？　男の口振りから、どうやらこの場所では、重要な人物らしい。

俺はニッタリと笑い返し、口を開いた。

「どいつもこいつも、酷い格好だな。まともな着物を手に入れる才覚すら、持ち合わせていないんだろうな。それが格好良いと思っているんなら、救いようのない大間抜けばっかりだ！」

俺の舌刀に、連中の顔にさっと怒色が浮かんだ。俺の台詞を理解しているわけではなさそうだが、口調に含まれた嘲笑の響きだけは、確実に受け取っているらしい。

その通り、俺はこういった連中を、心底から軽蔑している。いつの時代でも、どんな場所にも、ヤクザ、破落戸、与太者、愚連隊、ツッパリ、ヤンキー……。

薄暗がりのゴキブリのように、しつこく蔓延っている連中だ。どんな名前で呼ばれようと、どれほど世間に持て囃されようと、こいつらの本性は変わらない。人間の屑そのものだ！

「なにおう……！」

細長い顔のお兄ぃさんが、甲高い声で叫んだ。ぱくぱくと口を開いたり閉じたりしているのは、俺の挑発に、気の利いた返答が思い浮かばないからだろう。

俺は、ゆっくりと歩きながら、話し掛けた。

「この頃、江戸で悪党どもが鳴りを潜めているので、怪しいと思って色々と探りを入れたら、この上の廃寺に行き当たった。お前たち、末は獄門か、運が良くても、島流しの末路を辿るんだろうが、いったいここで、何を企んでいる？　さっさと白状すれば、俺が火付盗賊改の榊原源五郎配下の与力に話をつけて、刑の軽減ぐらいは掛け合ってもいいぜ。さあ、どうする？」

俺が喋っている間、連中は「なにおう」とか「ふざけやがって」とか「野郎」とか、色々口の中で呟く。だが、足は膠（にかわ）に張り付いたように、その場で動けない。

もちろん、俺の【遊客】としての迫力が、連中を釘付けにしているのだ。時代劇で、ヒーローが、悪人の罪を並べ立てる際、敵役が

なぜか動かないままヒーローが喋り終わるのを不思議に思ってはいないだろうか？　仮想現実の江戸では、当たり前なのだ。

「て……手前は誰だ！　名前を言え！」

兄貴分の顔が、怒りの頂点に達したのか、赤黒さから逆に蒼白になった。

「問われて名乗るは、おこがましいが……知らざあ、言って聞かせやしょう……」

俺は気分が高揚していた。実に楽しい！

「姓は鞍家、名は二郎三郎！　人呼んで？抜け参りの二郎三郎？！

どうだ、心当たりがあるかね？」

俺の名乗りに、連中は一斉に「ぎょっ！」とした顔つきになった。どうやら、全員、俺の名前に心当たりがありそうだ。

キョトキョトと落ち着かなく、お互いの顔を見合って口を動かした。

「おら、知ってる……！　辰兄いが、こいつのせいで、島流しの刑に遭ったって、聞いているぜ！」

「俺もだ！　押し込みの親分が、何人も奴の手配りでお縄になったってえ、噂だ！」

「どんな場所にも、するりと入り込む、幽霊みたいな奴だって聞いたが……」

連中の顔に、はっきりと怯えの色が浮かんだ。俺の異名は、さんざん耳に胼胝（たこ）ができるほど、聞かされているのだろう。

先頭の細長い顔をした男が、ぶるぶると全身を震わせ、身内から高まる決意を堪えているような表情になると、ついに爆発したかのような叫び声を上げた。

「やっちまえ！　生かして帰すな！」

やれやれ、全く型通りの台詞だ。

男の型に嵌まった叫び声は、それでも背後の連中を、背中から突き飛ばすように前へと押し出す力は一応あったようだ。

どどっ、と一斉に前へ飛び出し、俺を目掛けて殺到する。手にした武器を振り上げ、目を吊り上げて、必死の勢いだ。

俺は刀を抜かぬまま、軽くステップをして、奴らの攻撃をひょいひょいと、寸前で躱し、側をすり抜ける際に、手刀や、拳で素早く当身を食らわす。さらに関節を逆に捻り、投げ飛ばす。おまけに蹴りを入れていた。

こんな連中に、武器を使うまでもない。俺の中に存在する、北辰一刀流の達人が、男たちを目にした瞬間、力量を計っていたのだ。

もちろん、現実の俺は、剣の達人でもないし、ヒーローでもない。仮想現実の江戸だけで通用する、無敵の超人なのだ。

俺が通りすぎた後に、通路の床に、奴らが呻き声を上げ、のた打ち回っていた。悶絶している何人かは、骨折しているだろう。

だが、俺は、良心に何の痛痒も憶えなかった。どんな悪事をしていたか知らないが、こんな場所で巣食っている限り、当然の罰である。

先頭の、兄貴分が取り残された。俺は、わざとこいつには手を出さなかった。あっという間に一人だけ残された男は、顔中から冷や汗をびっしりと浮かべ、呆然と立ち尽くしている。

相変わらず、馬鹿長い刀を肩に担いだままで、抜いていない。俺の早業に、抜くのをすっかり忘れていたのだろう。

俺はせせら笑ってやった。

「どうした？　お兄いさん！　まだ、やるかね？」

落ち着きなく、男は周りを見回す。勝ち目がないと判断したのか、表情が下卑たものに変わった。どうやら下手に出る気になったらしい。

「へへへへ……。鞍家二郎三郎さんとやら、お強いんで御座んすね……」

今にも揉み手をしそうな態度に豹変する。敵(かな)わないと見たら、俺の足の裏でも躊躇いなく舐めそうな勢いだ。俺は嫌悪感を押し隠し、頷いてやった。

「さっきの、検校と言う名前は何だ？　お前たちの頭目なのか？　企みは何だ？」

男は唇を忙しく舐めた。どう答えようかと、ありったけの知恵を結集しているようだ。

俺は奴をぐっと睨みつけ、厳しく詰問した。

「答えろ！」

男は全身が感電したかのように、大きく震えた。俺の気迫に触れ、一瞬ぽけっと痴呆のような表情を浮かべる。もう、こうなれば、俺の言いなりだ。

「お前たちの頭目に会わせろ！」

ぎく、しゃくと、男は棒を呑んだように身体を強張らせ、手足を突っ張った妙な姿勢で歩き出す。

「こ……、こちらで……」

案内を始める男の背後を、俺は歩き出す。

虎穴に入らずんば、虎子を得ず……。
ふと、そんな諺(ことわざ)が頭に浮かぶ。
だが、俺の踏み込んだのは、虎穴どころか、竜の顎(あぎと)であるとは、思っても見なかったのだ。

六

ひょこひょこと、漂うような歩き方で、男は俺の目の前を案内していく。

通路を何度か曲がるうちに、照明は暗く、剣呑な雰囲気が周囲に漂ってくる。壁は地下水が洩れているのか、じっとりと湿り、薄汚れた筋が、何本も斑模様を描いていた。

俺は背後から声を掛けた。

「おい、いつまで歩くつもりだ？」

ぴた！　と、男の足取りが止まった。ひょい、と振り向くと「ひひひひ……」と掠れた笑い声を上げた。

不意に見せた男の変貌に、俺は立ち止まり、無言で睨みつけた。

男はうっすら、頬に笑いを張り付かせたまま、横目で俺を睨んだ。厭な目付きだ。悪企みが、はっきりと目に出ている。

「おい……！」

一歩、前に出ようとした瞬間、男はいきなり前方に弾かれたように跳躍した。出し抜けの変化に、俺は面食らっていた。

男の表情が「してやったり！」と言いたげなものに変わる。

「わあっ！」

俺は叫び声を上げていた。

男の姿が、目の前から消えうせる。突然の落下の感覚に、俺は完全に頭の中が空白になっていた。

反射神経のみが、俺を救っていた。

俺は空中で身を捻り、落下の衝撃に全身の筋肉を緊張させていた。足先が床に当たる感覚があって、俺は膝を曲げ、着地していた。
顔を上げると、ぽっかりと空いた天井の穴から、男が細長い顔を見せ、俺の姿を確認している。

「ちっ！　無事だったか……」

舌打ちして、悔しそうな顔になる。
みすみす、罠に引っ掛かってしまったのだ！　何と言う醜態！
床は落とし穴になっていたとは、全然、これっぽっちも気付かなかった！
俺は素早く、自分の置かれた状況を見定めた。と言うより、どれほど酷い状況になっているのか、確かめたのだ。

三メートル四方ほどの、四角い箱型の穴に、俺は落ち込んでいた。
上は跳ね蓋になっていて、男が通過した瞬間、俺をぱっくりと呑み込む仕掛けだった。
高さも同じくらいはあった。壁はつるつるの平面で、手懸り一つ、見当たらない。登るのは無理だ。

「どうした？　鞍家二郎三郎ともあろうお人が、こんな間抜けな罠に掛かるとは、まったく、お笑い種だなあ！」
男は悪意たっぷりに俺に向かって嘲笑し、言い終わると仰け反って笑い声を上げた。

「珍しい客人ですなあ……」

別の声が割り込み、俺を覗き込んでいた男は、ぎくりと身を強張らせる。
新しい声の口調は、ビロードのように滑らかで、抑制の効いた、

知性を感じさせるものだった。俺を覗き込んでいる男とは、格段の違いを感じる。

「検校様！　鞍家二郎三郎とかいう、お節介野郎を捕まえましたぜ！　俺が誘い込んでやったんだ！」

「判っておる……」

新たな声は、五月蠅（うるさ）そうに、男の説明を一蹴した。男は叱られた子供のような表情を見せて、項垂（うなだ）れた。

そうか、この声が【検校様】とか呼ばれている、陰謀団の頭目なのだ！　俺は、声を張り上げた。

「検校とか言うのは、お前か？　ここは何をする場所だ？　企みは何だ？」

――ほっほっほ……。

検校は、さして可笑しくもなさそうな笑い声を上げた。

「お主の名前は、ちょくちょく耳にする。現実世界のヒーロー気取りの、お調子者だ。江戸で小悪党を相手にしていれば良かったものを、わざわざこんな所まで飛び込むとは、身の程知らずも極まったな！」

検校の台詞に、俺は眉を顰（ひそ）めた。

「ヒーロー気取り」とは、江戸のＮＰＣの発想ではない。明らかに、現実世界の【遊客】の口振りだ。

が、そうとも言い切れない。検校の口調には、はっきりと江戸ＮＰＣ町人の口調が木霊している。

さらに謎は深まった。
考え込んでいる俺に、検校は話し掛けた。
「儂の正体に思いを馳せているのであろうな……。知りたいか、儂の正体を？」
「ああ、お前さんが、教えてくれるなら」
俺は頷いてやった。
「儂は【暗闇検校】と自称している。なぜ、このような異名を自称しているのか、判るかね？」
「さっぱりだな。俺は、謎解きが苦手でね。検校とは、江戸で、ピーッ！」

俺の言葉は、途中で警告音で遮（さえぎ）られた。俺は思わず口に出そうになった罵り言葉を押し殺す。
仮想現実では、身体的、あるいは精神的欠陥がある人間を貶（おとし）めるような言葉は制限されている。言葉に発した瞬間、警告音が鳴り響く仕掛けになっている。俺は唇を舐め、言い換えた。

「……目が不自由な連中が就ける地位の最高位だ。それを自称するとは、あんたは、目が見えない不幸を背負っているのか？」
相手は、微かな溜息を吐いていた。
「いいや、儂は、ちゃんと目も見えるし、耳も達者だ。しかし、儂は見えていて、見ていない。聞こえているが、聞いてはいない。つまり、本物ではない。そこでお前さんを覗き込んでいる男と、同じだよ」
検校の説明に、俺の頭の中に天啓が閃いた！　まさか、検校の正体とは……！
「さて、お喋りもお終いにしよう。お前さんと話せて、楽しかった

よ……」
検校の口調が、急に平板なものに変わった。もう、俺に関しては、興味の一欠片もないという口調だ。
俄(にわ)かな不安に、俺は叫んでいた。
「おい！　俺を、どうするつもりだ？」
「死んで貰う。ここまで忍び込まれるとは、儂も不覚だった。今は大事な時期なのでな……お前さんに邪魔されたくない……」
検校が言い終わると、一瞬にして、俺を呑みこんだ撥ね上げ蓋が戻った。落とし穴を闇に包む。俺は、完全な暗闇に閉じ込められた。

どうするつもりだ……？

俺は唇を噛みしめ、闇の中で立ち尽くしていた。闇の中で、俺の耳が微かな変化を捉えていた。

ちゃぷちゃぷちゃぷ……。

水音だ！
やがて水音は、はっきりとした轟音となって、俺を呑み込んだ暗闇に響いていた。気がつくと、足下に冷たい水を感じていた。
水責めだ！　検校の奴、俺を溺れさせるつもりなのだ！

逃げなくては……。

俺は必死になって、周りの壁を手探りしていた。
明かりのあった時に確認していた通り、何の手懸りもない。手は、すべすべした表面を虚しく撫でるだけだった。

七

水責めだ！　検校の奴、俺を溺れさせるつもりなのだ！

逃げなくては……。

俺は必死になって、周りの壁を手探りしていた。

明かりのあった時に確認していた通り、何の手懸りもない。手は、すべすべした表面を虚しく撫でるだけだった。

水は、すでに俺の胸まで達している！

が、俺には最後の手段があった！

俺は目を閉じ、暗闇で、ある暗号を思い浮かべた。緊急脱出のための、暗証である。

俺の視界に、仮想現実接続装置の、ウインドウが開く。ウインドウに「仮想現実の接続を切断して、現実に目覚めますか？」と表示が浮かび、「はい」「いいえ」の選択肢が出現する。

俺は、にんまりと、闇の中で笑いを浮かべた。

これがあるため、俺は江戸で？抜け参りの二郎三郎？という称号を得ているのだ。どんな危急に直面しても、俺は悠々と仮想現実から逃げ出し、現実に目覚める特技を持つ。

俺は選択肢の「はい」を選んだ。ところが……。

何も起きない！

相変わらず、俺は落とし穴に閉じ込められたまま、押し寄せる水に、全身を浸している。もう、水面は首まで達している！

――はっはっは……！

検校の高笑いが、闇に響いていた。

「今、お前さんは、仮想現実の接続を断ち、目覚めようとしていたな？　無理無理！　廃寺の地下は、結界になっておる。あんたたち、【遊客】が、出現するのも、脱出するのも不可能なのだ！　お前さんは死ぬのだ！　この地下でな……！」

水面は口許まで達していた。俺は必死になって水面をばちゃばちゃと掻き分け、立ち泳ぎを続けていた。

いずれ、水面が上がって、俺の頭は、撥ね上げ蓋に着くだろう。その後は、上がってくる水面に、完全に没してしまい、溺れるだけだ。俺は途切れ途切れに、検校に向かって叫んでいた。

「俺を殺しても……無駄だぞ！　俺の本体は……、現実で眠っているだけだ……。今、俺が死ねば……、本体は……現実で目覚め、また同じ対決の繰り返しになる……」

検校は物憂げな返事をした。

「左様……。確かに、お前さんは、五体無事で目覚めるだろう。が、ここ数日間の、江戸での記憶は失われる。確かにあんたは、自分が江戸で死んだのは判る。しかし、理由までは判らないだろう。再び、儂の目の前に現れるまでは、時間の余裕が生まれるのでね。ま、それまで、気長に待つさ。あんたが又ぞろ、のこのこ間抜け面を下げてくるのをね」

最後の部分は、もうはっきりとは聞き取れなくなっていた。すでに水面は、落とし穴のほとんどを占め、俺の身体は、水中にぷかぷかと漂っているだけだ。

微かな空間に、俺は必死に鼻を突き出し、最後の足掻きに、酸素の残滓を、貪るように吸い込んでいた。

がばり……と、完全に水中に俺の身体は没していた。もう、一息の空気すら、存在しない。俺は、ぐっと息を堪え、蓋の裏側をがりがりと爪先で抉っていた。

頭が、がんがんと割れるように痛んだ。肺が酸素を求め、爆発するように膨らんでいる。ごおごおと耳の中で、血液が轟いているのを感じて、遂に俺は水中で口を開いていた。

どっと俺の口に、水が溢れ、肺に冷たい水が、わっとばかりに侵入した。

意識が遠ざかり、なぜか俺の耳に、検校の高笑いが木霊していた。

俺は、死んだ。

一

出し抜けに「あなたの死体が発見されました。大変、お気の毒に思います」と通達されたら、どんな気分だ？

俺は性質（たち）の悪い冗談か、と一瞬ちらっと考えた。

が、仮想現実接続装置のディスプレイごしに、俺を見返している江戸入府管理事務所――通称？関所？の役人の大真面目な顔付きを見ているうち、冗談事ではないと不意に思い当たったのである。

「俺の死体、かね？」

問い返すと、関所の担当役人は、表情を変えず、静かに頷き返した。端正な顔立ちで、感情など完全に消し去った、人の顔の形をした機械のようだった。

頭の月代は綺麗に剃り上げ、丁髷はぴしりと真っ直ぐに一筋の乱れもなく、決まっている。身に着けている裃も、ぱりぱりに糊が利いているし、両方の肩口は、ディスプレイから、はみ出しそうな勢いである。

「事情を聞かせてくれ」

俺は自分の部屋の中で、仮想現実接続装置の前に椅子を持ち出し、姿勢を楽にした。

どうやら三日ほど、仮想現実にいたらしく、俺の腹は空っぽになっていた。胃袋はすぐさま食物を摂取しないといけないと、五月蠅く抗議の声を上げていたが、俺は完全に無視して、役人の言葉を待った。

「明け六つ頃……ああ、失礼しました。午前四時頃……」

「江戸の時刻については、知っているよ。おれを誰だと思ってるんだ！」

俺は思わず、苛立たしく、役人の言葉を遮った。役人の顔に、初めて感情らしきものが表れ、頬を赤らめる。が、すぐ立ち直り、淡々と報告を続けた。

「見つけたのは漁師です。朝方、金杉橋から漁に出た漁師が、網を引き上げると、死体が引っ掛かっていたのを見つけて、すぐ役人に報せたという次第で……。身に着けている着物の柄から、あなたの死体だと判りました。検死の結果、溺死という結論が出ました」

俺は呆然と呟いた。

「土左衛門か……。死体は酷い状態だったろうな。見つけたのは金杉橋の側だったのか」

役人は小さく頭を振った。

「いえ、少し沖に出た場所でした」

俺は頭の中に、江戸の地図を思い浮かべた。

「金杉橋から少し沖合いとなると、潮目はどうなっている？　こうっ……と。死んだのは品川あたりか……？」

俺は思わず「殺された」と言いかけ、慌てて「死んだのは」と言い直す。まだ、殺人と決まったわけではない。

役人は軽く頷く。

「左様ですな……。漁師の証言から、その時刻には、潮目は品川から流れてくると申しておりましたから、大体、その辺でしょう」

言葉を切り、目を光らせた。

「いかがいたします？　すぐ、こちらへお出ましになられますか？」

俺は思い切り顰め面を作っていた。

「そうしたいが、駄目だ。知っているだろう？　強制切断が起きた

後は、まる一日、そちらへ行けないのは」

役人の顔に、初めて気の毒そうな表情が浮かぶ。関所の役人および、江戸の行政、治安を担当する役人には、俺たち現実世界の【遊客】について、細かな事情を承知している者が多い。そうでないと、俺たち【遊客】が、江戸で面倒事に巻き込まれた際、きちんと対応できないからだ。

仮想現実が普及して、様々な問題が浮き上がってきた。現実から逃げ出し、仮想現実に接続しっぱなしの、プレイヤー……【遊客】が問題になったのである。それを防ぐため、ある一定時間、接続を続けると、強制的に切断される安全装置が組み込まれた。強制切断がなされると、再接続するには、丸一日、休養を取らないと利用できない。

「そうでしたな……。それに、あなたが江戸に入府する時、再登録も必要でしょう？」

役人の指摘に、俺はすっかり再登録が必要なのを忘れていたのを、気付かされた。

そうだ！　俺は……と言うか、俺の仮想人格は……江戸で死体になっているのだ。だから、俺が再び江戸に入るには、新しい仮想人格で、再登録しないと、仮想現実は受け付けてくれない。

江戸入府……本来は入国と言うべきなのだろうが、なぜかこちらの用法が罷り通っている。まあ、俺たち【遊客】は、江戸ではある種、特権階級と見做されているから、そう大袈裟とは言えないかもしれない。

俺は素知らぬ顔を作り、相槌を打ってやった。

「そうだな……。仮想人格再登録の手間もあるから、そちらへ向かうのは、明日になる……。詳しい事情を知りたいから、人数を集めておいてくれないか？」

役人は「お待ちしております」と頭を下げ、接続を断った。

思いがけない通達に、俺は何も映っていないディスプレイを見詰め、腕を組んだ。

二

翌日、俺は仮想現実接続装置を使い、江戸へと舞い戻った。新たに仮想人格をデザインする手間を惜しみ、以前とまったく同じ外観を選ぶ。

現実世界と同じ、身長百七十センチ、体重は五十五キロと、痩せ型の身体に、身に着ける着物は、黒地に、伊呂波(いろは)四十八文字が、大きく白く抜かれて一面に描かれているという着流しだ。この着物のせいで、俺は江戸では「伊呂波の旦那」と渾名(あだな)されている。

頭髪の月代は剃らず、丁髷を乗せた浪人姿である。

俺が最初に向かったのは、仮想現実の江戸での玄関口である小仏関所である。江戸には幾つかの関所があって、俺のような現実世界の【遊客】は、まずここを通過して、登録を受けなければならない。

仮想現実に転移すると、最初に目に飛び込んでくるのは、どっしりとした外観の、関所の正門だ。俺の前には、すでに江戸に入ろうと登録を待っている【遊客】の、長い列ができていた。

いるいる……！　若いのや、そうでない者、男女取り混ぜて、十数人が列を作っている。

押しなべて、皆、ど派手な他人目を引く格好をしている。

雲水の格好をしているのに、着物の地は、目にも鮮やかな真紅の衣の逞しい坊主。

列の中頃には、巨大な刀を背中に斜めに差している奴がいる。刀の柄は、右肩から突き出ている。あれで、いざと言うとき、抜けるのかね？

まっ昼間と言うのに、手拭を顔に垂らした夜鷹の姿をした女。あ

んな格好で江戸に入ったら、どんな目に遭っても知らないぜ！

俺は列の最後に並んだ。並ぶとすぐ、背後から「ぱたぱた」という駆け足が聞こえる。首を捻じ曲げ、そちらを見ると、一人の女の子が息を切らして走ってくる。

女の子の衣装は、多分、忍者のつもりらしい。時代劇で見るような忍びの格好だが、まっ黄色の目がチカチカするような色合いの上着に、太股も顕わなセクシーさだ。髪の毛はポニー・テールにしていて、鉢巻をしている。背中には短い刀を差し、手甲脚絆というお決まりの姿である。これで忍者と主張するのだから、お笑いだ。

俺は思わず、忍び笑いを洩らしていた。

女の子は、俺の笑い声に、きりっとした鋭い目で睨みつける。小さめの顔に、吃驚するほど大きな瞳をしている。瞳の色は、微かに茶色がかって、折からの日差しに、一瞬きらっと金色に輝いた。

「何が可笑しいの？」

女の子は、俺が飛び上がるほど大きな声で叫んだ。喧嘩腰である。叫び声に、他の【遊客】たちが「何事？」とばかりに、興味津々の表情を浮かべ、こちらを振り返った。

俺は決まりが悪くなる。

「いや……、気を悪くしたなら謝る」

両手を曖昧に上げる俺に、女忍者は追及の手を緩めない。

「だから、なぜ笑ったのか聞かせて！　訳を聞くまで許さないわよ！」

やれやれ、飛んだのに捕まっちまった。

「君、江戸は初めてか？」
「そうよ！　悪い？」

女の子は、挑発的に顎を上げた。背はそう高くなく、俺の顎にやっと届くくらいだ。
「その格好からすると、忍者志望かな？」
「当ったり前じゃん！？くノ一？って、知らないの？」
今度は俺は堪えきれず「ぷーっ！」と、思い切り吹き出してしまった。女忍者は益々いきり立った。
「く……くノ一……だって！　女が忍者になんて、そんなの、いるものか！」
女忍者の顔に、やや躊躇（ためら）いの色が浮かぶ。俺の反応に、自信がなくなったらしい。
「だって……あたし、見たもん！　時代劇で女の忍者は？くノ一？って、呼ばれているんでしょう？」
「あのな……」

俺は笑いを引っ込め、真面目な顔を作る。
「？くノ一？というのは、忍者同士の隠語だ。女という漢字を、分解すると？くノ一？となる。それから来ているが、本来の意味は、城に忍び込む際、内部の女を道具にするからなんだ。あくまで忍者の道具の一つとして言われているんだ。歴史上、忍者になった女はいない」
「そ……そ、そうなの？」

女忍者の視線が、落ち着きなく、キョトキョトと彷徨（さまよ）った。

俺は女の子の衣装を指さした。
「それに、その格好！　十キロ……いや、こちらの言い方なら十里

先からでも目立つ格好だぜ！　他人目を避けなければならない、忍者が、それじゃ、チンドン屋だ！」

女忍者は、これには参ったようだ。だが、俺の着流しを見て、皮肉な笑みを浮かべる。

「あんただって、似たような格好じゃないの。他の皆からすれば大人しいけど、随分と目立つ柄よねえ」

「うん。俺は江戸では？伊呂波の旦那？って渾名されている。身分は浪人だから、大目に見るさ！」

俺はそれきり会話を打ち切り、懐手をしてほりほりと顎を掻いた。女忍者に背を向け、登録を待つ。

三

関所の大門を潜ると、間口九メートル、奥行き五メートル半の面番所があって、正面に関所の責任者である番頭が正座している。奥には横目付けと呼ばれる役人が、床机（しょうぎ）を出して、帳面に勿体ぶった顔付きで何やら記入している。

番頭は実直そのものといった顔付きで、糞面白くもない関所の業務を、無表情で勤めている。二十俵二人扶持だから、薄給である。

まあ、近郷の苗字帯刀の大百姓が採用されているわけで、百姓のほうが本業だから、薄給でも構わないわけだが。

身につける着物は、当人も百姓の本分を弁えて、木綿の質素なものばかりだ。

「これ！　女は、あちらじゃ！」

足軽――関所の雑用係が、俺の後ろから面番所に向かおうとする女忍者を呼び止めた。女忍者は、訳が分からず、きょとんとした表情である。俺は耳打ちした。

「男女別々になるんだ。あっちでは人見（ひとみ）女ってのが待ってるからな」

「ああ、そう！」

女忍者は、明らかに気分を害した様子だ。

俺はニヤニヤ笑って、黙っていた。男女同権は、江戸では未だ未解決の大問題である。俺たち創設者のメンバーでも、女尊男卑の風潮――男尊女卑の間違いではない。実は江戸時代、江戸は女性のほうが権利が高かった。何しろ江戸の町人の男女比率は、女性が少なく（幕末ではやや同数に近づいたが）女は貴重で、守られていた。男女が結婚する際、離婚する時の保証金を明確にした契約書を交わ

したほどである――をどうにかすべきだという意見があるのだが、結論は出ていない。
実質的に、江戸では男女同権であるが、こうした形式的な場面では、古くからの慣習が顔を出す。

女忍者は、ぷりぷりと怒りを押し殺し、女専用の改め所へと案内されて行った。女忍者は、自分が差別されていると誤解しているのだ。
見送った俺は、ゆっくりと、関所の配置を眺める。
面番所の周囲には、高さ二メートルほどの木柵が巡らされ、高札が立っている。高札には、これから江戸へ入る際の注意点が、俺たち【遊客】たちにも分かるよう、楷書体で列挙されていた。もっとも、誰も読む者はいないが。

面番所の屋根の向こうに、富士山の偉容が遥かに聳えている。
もちろん、本物の富士山と、まったく同じ高さで、頂きには僅かに雪が残っていた。この景色が【遊客】に「江戸に来たんだ！」と実感させる。

関所を通過するため、【遊客】が一人一人、番頭の前に進み出ると、番士が書見台のようなものを前にして、時々触筆（タッチ・ペン）で操作している。
書見台は、実は走査器（スキャナー）だ。【遊客】が前に進み出ると、走査器が【遊客】のデータを瞬時に走査し、書見台そっくりのディスプレイに表示するのだ。御禁制の所持品を探している。問題がなければ、入府が許可され、次回からは江戸での所定の出現定点を利用できる。
「次の者！　出ませい！」
足軽の掛け声に、俺は、のっそりと前へ進み出た。

走査器を覗き込む、番士の顔がたちまち驚きに変わる。さっと番頭に伸び上がり、急いで耳打ちをした。番頭も仰け反るような格好になって、俺の顔をまじまじと見詰める。

「俺の名前は、鞍家二郎三郎。何か問題でも？」

番頭はありありと狼狽の色を顔に浮かべ、背後の定番人に上体を捻じ曲げた。

「これ！　儂はこれより、鞍家殿と面談があるゆえ、そちは代人となって、【遊客】たちの相手を致せ！」

早口で命令すると、あたふたと立ち上がる。定番人は、素直に平伏すると、番頭の代わりに面番所の正面に正座した。

俺は番頭の後に続き、面番所の建物に上がりこんだ。大小は右手に持ち替える。

奥に進むと、番頭勝手と呼ばれる小部屋に入る。さらに奥が台所で、床敷きの狭苦しい部屋に、俺と番頭は向かい合って座った。

番頭はゆっくりと胡坐（あぐら）の形になった。板敷きでは、胡坐が正式である。俺は両足をだらしなく投げ出した。両手を背後に突いて、尻餅をついた格好である。

腰を降ろすと同時に、がらりと音を立て、大小を部屋の隅に投げ出した。

この大小というやつ、恐ろしく重い！　そりゃあ、当時の武士階級は、身分の象徴として腰にぶら下げるのも平気だったろうが、俺は【遊客】だ。生まれながらの侍じゃない。

大小の代わりに、もっと手軽な武器はないだろうかと、この時も思ったが、妙案は浮かばない。当分、こいつに我慢するしかないのだろう。

向かい合った番頭は「へへーっ！」と全身に畏(おそ)れを顕わにして平伏した。俺は手を振って、相手の畏まりを止めた。

「よせよ！　堅苦しい真似は、苦手だ」

「しかれど、鞍家様は江戸の開闢(かいびゃく)お歴々のお一人で御座りますれば……。身供など、同席も憚る高貴なお方……。何しろ将軍様御目見という尊い御身分で御座りますぞ！」

「馬鹿馬鹿しい……」

俺は苦り切った。

確かに俺は江戸で、征夷大将軍――将軍に拝謁できる特権を持つ。将軍は、仮想現実の江戸を創設する中心プランナーで、俺たちは計画の細部を手伝ったに過ぎない。が、俺は江戸が完成した後も、一度も拝謁の特権を行使してはいない。

何しろ将軍は、俺たちにとっても伝説の人物で、口さがない連中の中には、実在すら疑う奴もいる。

俺は番頭の気分をほぐすため、笑いかけた。

「俺は江戸では、ただの浪人。この着物のおかげで？伊呂波の旦那？って呼ばれている。そう、しゃち強張らなくてもいいぜ！」

「恐れ入り奉りまする……」

降参だ！

俺は番頭の目を見据え、強引に話題を変えた。

「俺の身に何が起きたか、承知しているな？」

番頭はゆっくりと点頭した。

「関所には、江戸で起きた重大な事件は、すぐさま通報される決ま

りで御座りまする。鞍家様が、死体で発見されたという変事は、まったく驚き入り申す他は御座りませぬ」
「まったくだ」

俺は同意した。そりゃ、江戸で死体が発見されるのは珍しくはない。その死体が、俺のような【遊客】だったのが、珍しい……驚天動地の変事だ！　……のだ。

「溺死だったそうだな。本当にそうなのか？」
番頭は、不審そうに、俺を見つめ返した。
「検使（けんし）与力による検分で御座りますれば……。報告によりますれば、肺のすべてに水が溜まっておったそうな。明らかに、溺死で御座ろう」
「なるほどな……」
俺は自分の考えを呟いていた。
「俺たち【遊客】が、江戸で死ぬのは、不思議じゃない。突然の事故で、旗本の馬に蹴られる、大八車に轢（ひ）かれる、防火用水の天水桶が崩れて下敷きになるとか、厭な話だが、辻斬りに後ろからばっさりと斬られたとかなら、頷ける。しかし溺死だぜ！　溺れ死ぬ前に、たっぷりと時間の余裕があったはずだ！　その間に、非常脱出の、現実転移すらできないとは、信じられねえ。いったい、俺の身に何が起きたんだ？」

番頭は気弱げな、沈黙を保った。百姓にして関所の役人に取り立てられるほどだから、仕事に対する熱意や、義務感は人並み以上だろう。
だが、生憎、想像力は蝿の脳味噌ほども持ち合わせていないようだ。もとより、俺は番頭の返事など当てにはしていないが。
俺は大小を掴み、立ち上がった。
「埒もない考えはやめだ！　俺はすぐ、江戸入りをする！　おい、

猪牙(ちょき)舟を頼むぜ！」
「畏まって候！」
明確な俺の指示に、番頭の顔に初めて笑顔が浮かんだ。

四

猪牙(ちょき)舟は、すらりと細長い船体をした、快速船である。江戸の遊び人が、吉原通いの時、船足の速い舟を求めたため、遊び人の専用と思われているが、もちろん、江戸だけで使用されたわけではない。

舳(へ)先が尖がり、それが猪の牙に似ているから猪牙と呼称した――一説では長吉という舟大工が工夫して、長吉舟から転訛した――などとされる。

艫(とも)には船頭が俺を待っていた。がっしりとした身体つきで、両目が鋭い。

番頭と一緒に船着場に足を運ぶと、女忍者が先に舟に乗り込むところだった。女忍者は、俺の気配に顔を上げた。

「あら……あんた！」

「また会ったな」

俺は苦笑いを浮かべた。女忍者の後ろから舟に乗り込むと、見送りの番頭が桟橋で深々と頭を下げた。

「お気をつけ下さいませ」

番頭の丁寧な挨拶に、女忍者は首を傾げ、俺の顔を不思議そうに見詰めた。見るからに痩せ浪人姿の俺に、関所の責任者が慇懃な物腰で見送るのが、奇妙なのだろう。

「あんた、誰？」

俺は肩を竦めた。

「見たとおりの、痩せ浪人だよ。前にも言ったが江戸では？伊呂波(いろは)の旦那？で、通っている」

「舟を出しますので、しっかりと船端にお掴まりくだせえ」

船頭が嗄れ声を上げる。きい――、と艪(ろ)を動かし、舟はゆらりと微かに水面を切り裂きながら離れていく。女忍者は、俺の追及を忘れ、船端にしがみついた。

ちらりと振り返ると、番頭が桟橋に立ったまま、深々と頭を下げたまま、俺を見送っていた。

たちまち関所の建物は背後に遠ざかり、俺と女忍者を乗せた猪牙舟は、小仏川を下っていく。

辺りは初夏の盛りで、岩肌には緑が萌え上がり、眩しい日差しが水面にきらきらと反射している。猪牙舟は、のったりとした船足で、川面を下っていく。

平穏無事を絵に描いたような景色だ。

小仏関所は、現実の地理で言うと、高尾山裾野から八王子に位置し、小仏川は淺川に通じて、多摩川に注ぎ込む。俺を運ぶ猪牙舟も同じルートを辿るが、現実の川筋とは、ちょいと違っている。何せ、江戸への最短ルートであるから……。

「おい！　しっかりと掴まっていろよ！」

俺の前に座っていた女忍者は、問い掛けるように、こちらを振り向いた。俺は叱り付けた。

「口を閉じていろ！」

女忍者は、俺の命令口調にむっとした表情になった。

だが、俺の真剣な顔付きに、それでも慌てて前に向き直り、船端を掴んだ手に力を込めた。

「そうれ！」

船頭が声を張り上げ、艪を一杯に動かした。

途端に、舟は、弾かれたように前に飛び出した。

「きゃあああっ！」

女忍者の甲高い悲鳴が、辺りに響き渡る。俺は口をぎゅっと引き結び、次にやってくる衝撃に備えていた。

ざっばあああん！

舟は空中に一瞬、ふわりと浮かび、次いで物凄い勢いで落下し、再び水面に着水する。

ずしんと尻の下から衝撃が突き上げ、真っ白い水飛沫（ひまつ）が、両側から水のカーテンのように広がった。

川は滝となって雪崩落ちていた。そこを猪牙舟は真っ直ぐ突っ切り、落差のある水面を次々に越えていく。

もちろん、本当の小仏川がこのようであるはずもない。これは小仏関所から江戸へ最短で向かうための、ちょっとした修正なのだ。距離と、時間を短縮するため、位置エントロピーに手を加えている。本来は数十キロはあろうかという距離を、僅か数キロに短縮するため、数百メートルの大瀑布を一気に下るのと同じなのだ。

川は急流に姿を変えていた！

どうどうと轟音が響き、真っ白な飛沫が辺りを霧に包んでいる。霧は途中の行程を隠すのに役立ち、たった十分ほどで江戸へ到着するという不自然さを感じさせないための工夫だ。

だが、初めて江戸へ向かう旅人にとっては、たった十分は、永遠にも思えるだろう！

揺さぶられ、撥ね上げられる。ざばんざばんと恐ろしい水音が周りを取り囲み、前後左右の区別すら曖昧になる。
水飛沫の隙間から、俺たちと同じ、江戸へ向かう別の猪牙舟の姿が垣間見える。乗客は、皆、俺と同じ【遊客】で、恐ろしい体験に、目を一杯に見開き、息を詰めて、恐怖に耐えていた。
艫で艪を漕ぐ船頭は、舟がどんなに上下左右に揺すられても、まるっきり動ぜず、手にした艪を巧みに操っている。
視線を上げ、周りを見渡すと、辺りの風景はリニア・モーターカーの窓から見たように、猛速度で後ろに飛び去り、緑と灰色と、空の青さが、だんだらに溶け合っている。
前方からは強烈な風がまともに吹きつけ、目も開けていられない。もっとも、本来の速度なら、音速を超えているから、俺たちは舟にしがみつくなど、とうてい不可能だ。

きゃあきゃあと、女忍者は息を切らせず、悲鳴を上げ続けている。なんという、肺活量だ！
そのうち、悲鳴だか、歓声だか俺には区別がつかなくなった。

五

不意に舟は、穏やかな川面を滑っていた。
静寂が辺りを包み、女忍者は飽きずに悲鳴を上げ続けていた。
「もう、いい。終わった」
俺は背後から、女忍者の背中を突っついた。
「え？」
ぼんやりとした顔を挙げ、女忍者は目をパチクリとさせ、辺りを見回した。
すい、と空中を、燕が一羽、視界を斜めに切り裂き、矢のように飛んでいく。
「ここ、どこ？」
「多摩川だよ。現代の地名で言うと、大田区の外れに当たる。俺たちは、すでに江戸に入っているといって良い。川の左が大田区で、右が川崎市だ」
「嘘！　こんな田舎が、どうして……」
女忍者の疑問は、もっともだ。川縁に見える景色は、一面の田圃で、江戸と言われて思い浮かべる、家々が犇き、無数の人々が行き交う光景は、どこにも見当たらない。
現実世界なら、そろそろ多摩川大橋が見えてきて、国道一号線が通っている。都会のド真ん中とは言えないが、現実世界なら大小無数の建物がごちゃごちゃと立ち並んでいるはずだ。
田圃の向こう側には、所々に農家が散見され、江戸というより、どこかの農村といった風景である。田舎らしく、ぷん、と堆肥の匂

いが鼻腔を刺激する。
が、江戸は中心部でも、半分は農地であった。十七世紀から十八世紀にかけ、江戸は人口百万を越え、世界有数――いや、世界最大の都会であった。それでも、半分の土地は農地であり、同時に世界最大の農村でもあったのである。

舟は、広大な敷地の屋敷が立ち並ぶ、一画に入っていた。立ち並んでいるのは大名の下屋敷群だ。
一つ一つの屋敷の敷地は思い切り広々としていて、塀に囲まれた内側には庭園が設えられ、樹木が高々と盛り上がって、屋根を覆っている。森の中に、屋敷の屋根が沈んでいるように見える。

幕末から開化期にかけ、来日した外国人の手記を読むと、いかに当時の江戸に、樹木が多かったかを記している。

ふと気がつくと、幾艘もの猪牙舟が、舳先を並べて桟橋に近づいていく。船客は、もちろん、【遊客】たちだ。皆、物珍しげに、初めて見る江戸の景色に、目を輝かせていた。
多摩川から、支流に入り、桟橋が見えてくる。

矢口の渡しだ。

渡しに近づくと、途端に雰囲気は猥雑なものに変わる。渡しの周りには、川縁に落ち込みそうなくらい近々と、幾棟もの建物が立ち並んでいるのが見えてくる。川に面した方向に、沢山の窓が開き、欄干には厚化粧の女が、鈴なりになって、こっちを見ている。

「【遊客】の旦那！　あちしと遊ばない？　たっぷり可愛がってあげるよう！」
「一人だけじゃないよ、一遍に、二人、三人を相手にする気はない

かえ？」
「あちしを見ておくれ！　ほら、こーんなに旦那を待って、肌が熱くなっちまった！」

きゃあきゃあと、姦しく騒ぎ立てる。皆、必死に自分を売り込もうと、身を乗り出し、手を振っている。

品川宿は、まだ一里ほど先だが、こんな場所まで、史実と違って、【遊客】を目当てに遊郭が立ち並んでいる。まっ昼間から、ここまで娼妓たちの白粉の匂いが漂ってきそうだ。

女忍者は、娼妓たちのド迫力に、圧倒されていた。目が合った娼妓の一人は「ふん！」とばかりに、競争相手を見る目つきで、険悪な視線を送ってくる。女忍者は、明らかな憎悪の感情に、戸惑っているようだ。

何しろ、俺たち【遊客】は、江戸ではお大尽だ。

江戸に入府する際、俺たち【遊客】には、一人当たり切り餅二つ――つまり、百両、現代人の感覚なら一千万円もの多額の支度金が受給される。

その理由は、参覲交代がないからである。

江戸は大消費地で、江戸にやってくる各藩の大名が、江戸で盛んに消費をした結果、人口が集まり、商業が栄えた。

大名が盛んに消費したのは、幕府の役人を饗応するためである。目的は一つ。幕府の「お手伝い」を免れるためである。

当時の幕府は、各藩の実力を削ぐ目的で、壮んに「お手伝い」を命じた。江戸城の修理、河川の整備、新田の開発……。それらは各藩の自腹で、幕府に命ぜられれば、拒否は不可能だ。

つまり、公共事業をどうか、我が藩に命じないで下さいと、幕府の役人に頼み込むために饗応したのである。現代と、まったく逆だ。

しかし、仮想現実の江戸では――。

江戸にいる大名は、定府の大名である。つまり参覲交代の必要がない、松平姓を許されている譜代大名や、尾張、紀伊、水戸の御三家、田安、一橋、清水の御三卿。

老中（現代でいうなら国務大臣）や若年寄（国務副大臣）、側用人（官房長官）の他にも、寺社奉行（文部科学大臣）や勘定奉行（財務大臣兼最高検検事）、町奉行（警視総監兼消防総監兼東京都知事兼金融大臣）、大目付（東京地検特捜部長）などの重職を務め、大名に取り立てられた幕臣なども、含まれる。

幕臣以外でも、【遊客】の中には、物好きにも幕閣に参加する者もいて、それらも大名や大身旗本の身分を手に入れた。

もちろん、俺たち江戸創設メンバーも、その気になれば、大名や諸奉行として取り立てられる。

しかし、俺は一切、その気はない。こうして、浪人身分で自由を謳歌するのが、一番気に入っている。

随分と列挙したが、それでも本来の大名の数からすれば、百分の一だ。

これでは本来の消費都市として成立しない。そのため、俺たち【遊客】に不釣合いなほどの金を持たせ、江戸で大名遊びをさせようという魂胆である。

矢口の渡しに到着した瞬間から、【遊客】には無数の誘惑が待っている。それに乗るのも一興、乗らぬもまた良し！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0452z/

電脳遊客

2011年12月13日07時45分発行